

ベトナム国はまず春秋の魯国になぞらえられる。魯国は孔子を生んだ聖人の地であるが周囲を各大国に囲まれた弱

小国で晋に臣従する。はてしなく小国に要求をおしつける大国晋をフランスに、礼節をもちながら晋の横暴のままになすことをしらぬ魯をベトナムになぞらせる。次に山野を放浪する皇帝咸宜は、自らを周の太王、蜀の劉備になぞら

える。つまりよこしまな力に王位を逐われ放浪し、やがて復活する貴種英雄だ。一方、臣下は、まず春秋晋の狐偃や趙衰ちようすいのようになければならない。咸宜は晋の公子重耳ちゆうじに比定される。重耳は晋献公の第二子であつたが、一九年の

流浪のあと、名君文公となつた。流浪の期間、文公を助けたのが、忠臣狐偃と趙衰など五人の臣であり、復権後はそれぞれ晋の国政に重きをなした。君臣関係は「同戚同休」どうせきどうきゅう、禍福をともにする関係とされる。劉備が蜀の漢中王となつたとき、劉備と苦楽をともにしたはずの関羽の位が低かつたために、関羽は位を固辞した。使者の費詩がなだめて

いうには、劉備と関羽はひとつの体のようなもので、ともに苦勞しともに喜びを分かつたはずなのに、どうして官位の高い低い、爵禄の多い少ないを問題にするのかと。つまり、咸宜の臣下は桃園の盟友のごとく、咸宜と一体であり、爵禄のために戦うのではない。